

古墳時代の大集落発見

—水垂遺跡—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



川に囲まれた集落跡 背後には古墳の群集する丘陵がみえる。

京都市伏見区淀樋爪町・水垂町^{ひづめ みずたれ}で古墳時代の集落跡を発見した。ここは京都盆地を流れる桂川・鴨川・宇治川・木津川などの主要な河川が集まり、淀川へ合流する地点のすぐ北側にあたる。現在でも降水量が多いと、しばしば冠水する地帯である。

発見した集落跡は竪穴住居・掘立柱建物からなり、これまでに竪穴住居 57 棟、掘立柱建物 14 棟がみついている。これらは北西方向から流れてきた 2 条の河川が合流する所にあり、河川に挟まれた地区と河川左岸の微高地上に広がっている。この集落は古墳時代

前期から古墳時代後期（4 世紀前半～6 世紀後半）まで営まれ、住居跡のなかには 4～5 回建て替えられたものがある。

みつかった竪穴住居の大半は方形で、大きさは一辺 3 m の小型のものから、一辺 7 m を超える大型のものまでであるが、5 m 前後がほとんどである。各住居内には炊事や暖房に使う炉あるいは竈^{かまど}があり、ほとんどが貯蔵穴をもっている。なかには床の四方を高くしたベッド状遺構を備えているものもある。

住居内に残された遺物はさほど多くないが、土師器の壺・甕^{かめ}、須恵器の杯^{つぎ}・壺のほか、砥石^{といし}などが

出土している。一方、掘立柱建物は 1×2 間や 2×3 間の小型のものが多く、最大でも 3×4 間である。なかには、束柱を備えた高床倉庫と考えられるものも数棟ある。

集落を囲む 2 条の河川は幅 10～15 m、深さ 1.5～3 m の自然流路で、外敵から集落を守る防御施設として利用されていたものと考えられる。

また、水量調節用の堰^{せき}が数箇所あることから、灌漑^{かんがい}にも用いられていたことをうかがわせる。堰は土砂や杭・木材などで堅固に作られ、建物の部材（柱・梯子^{はしご}・扉）なども多く転用されていた。



遺構配置図

河川全体からは多くの土器のほか、各種の農具（馬鋤・鋤・田下駄・杵・臼）や容器（盤・槽）などの木製品が、良好な状態で大量に発見されており、このほかに網のおもりと考えられる土錘や石錘もみついている。

集落のすぐ南側では周囲に溝をめぐらせた方形周溝墓と、壺を組み合わせた土器棺墓が、それぞれ一基発見された。大人と子供の墓と考えられる。集落の規模からみ

ると、みつかった墓の数は少ないが、ここが集落の墓域の一部であったことはまちがいないだろう。

さらにその南側では畑跡と水田跡がみついている。畑は集落に近いやや乾燥した微高地ぞいに、水田は低い湿潤な所に作られている。畑には畝に関連すると思われる小穴が点々と連なっている。栽培していた作物の種類は明らかではないが、畝の状況からみて根菜あるいは果樹のような根が深くま

で張る作物ではないかと推測している。一方、水田跡は一枚を30～150㎡に細かく区切った小区画水田で、これまでに45,000㎡以上の広がりを確認している。水田では細かく区画した低い畦のほか、通路として使用する大きな畦や、水の取り入れ口、耕作に携わった人や牛の足跡などもみついている。

これらの発見により水垂遺跡では居住、生産、墓の区域がそろってみつかったことになり、当時の様子を知る上ではきわめて貴重な遺跡であることがわかった。この集落は乙訓地域を開発した村々の一つで、かつて京都盆地の南部に広がっていた湖「巨椋池」周辺の低湿地で稲作を営んだムラと考えられる。

ともあれ、川に囲まれた村で竪穴住居や小型の掘立柱建物に住み、近くの水田や畑を人や牛の力で耕し、たまには川や湖で魚を捕る、といった素朴な農村集落の生活ぶりが、この遺跡からうかがえる。しかし、一方では身分の差が際立ってきた時代でもあり、今回発見したような、集落の近くの方形周溝墓や土器棺墓に葬られる者や、大小の古墳に葬られる者、あるいは墓らしいものには葬られなかった者、などの差があったと考えられ、そんなのんびりした生活は我々の空想に過ぎないのかもしれない。

近くには乙訓地域では最大の規模を誇る前方後円墳「恵解山古墳」があり、あるいはこの集落の人々もこうした古墳造りにかりだされ、厳しい日々を送っていたのかもしれない。（吉崎 伸）